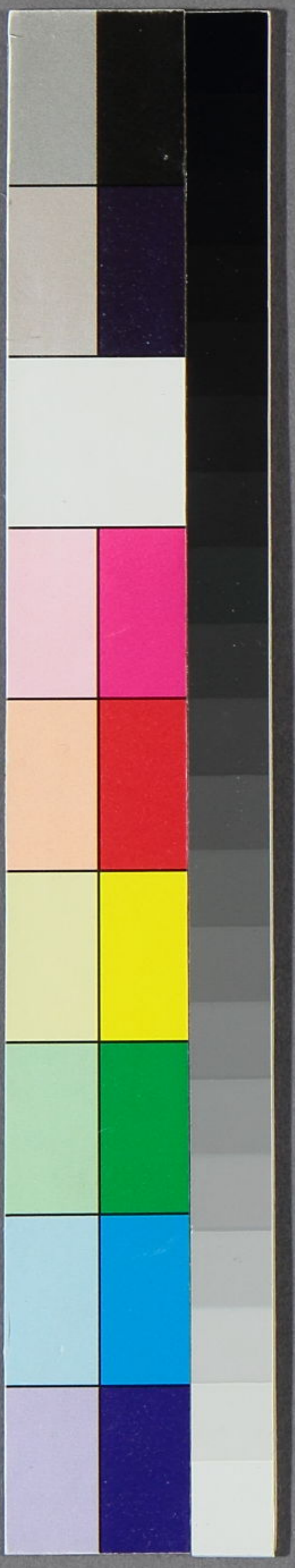


八代集抄

詞花志上下
雜上下

三十三

特別
イ 4
3163
104(33)





何やまもわらふ
わのあはれけし
我がいふあな
かゝるまわりの
まゝにわらふ
本に火をけり
いふくあはれ
室八幡下野の野
中はあはれけし
清きあはれけし
舞のまが燈は
とるし 社中あり
我ありあり
室の八幡の燈は

詞花和歌集卷第七

五上

あはれけし

國白前大政大臣

何やまもわらふ

あはれけし

あはれけし

あはれけし

あはれけし

隆憲法師



拾遺人丸多物部
 年をいへば
 五九のち
 柄のち
 拾遺人丸多物部
 年をいへば
 五九のち
 柄のち

拾遺人丸多物部
 年をいへば
 五九のち
 柄のち
 拾遺人丸多物部
 年をいへば
 五九のち
 柄のち

11

拾遺人丸多物部
 年をいへば
 五九のち
 柄のち
 拾遺人丸多物部
 年をいへば
 五九のち
 柄のち

拾遺人丸多物部
 年をいへば
 五九のち
 柄のち
 拾遺人丸多物部
 年をいへば
 五九のち
 柄のち

拾遺人丸多物部

もとよりしるす御律
 り(あまのり)
 こころをいひしよの神
 君はまへに御座り
 くれは結神のうけ
 中(難)のまへに
 かりんそと本意
 結神のまへに
 いしよのいひしよ
 伊勢のまへに
 ことまへに
 ことまへに
 ことまへに
 ことまへに

ことまへに
 あまのり
 ことまへに
 あまのり
 ことまへに
 あまのり
 ことまへに
 あまのり
 ことまへに
 あまのり
 ことまへに
 あまのり

御律

りせんとの心こ小園奏
 いしよのいひしよ
 ことまへに
 ことまへに
 ことまへに
 ことまへに
 ことまへに
 ことまへに
 ことまへに
 ことまへに
 ことまへに

出(必)はけり
 事(出)はけり
 事(出)はけり
 事(出)はけり
 事(出)はけり
 事(出)はけり
 事(出)はけり
 事(出)はけり
 事(出)はけり
 事(出)はけり
 事(出)はけり

僧都覚雅

月七月廿七日 大納言道綱

てふまゝかきつゝは

心いづれ
身れれをぢあひ
かゝ人方難もい我
のさなかりき多の故
とすつゝ身のみ限
こひ知ぬるは事のも
せりし君のたすかり
はすり難も人れれが
わひはくもさし言は
わひはくもさし言は
或に難も人れれが
しき人よりし月
都の内よりい垂しね
あまされの縁ね

吾乃身くくよめ

隆徳法師

身れれをぢあひ
けきあき人方さしけあ
在凌門持家成は乃
格者、意とらふよめ
わひはくもさし言は
縁福う、意乃か
谷泉院春宮と
ゆるよめ、源重之

乃意心細くも
そよすすし
風をいす
甲風く
宗紙云
と人の
十安き
准す
り心細
は集秀
我ふ

吾野山に
居の心
まは
むねに
むねに

風をいす
くけく
極河院
よめ

隆徳大吏

我ふ
あひ
野き
平祐奉

若原永実

むねに
くけく
むねに

ちゆらちひもさう
 同七終方ちかき
 けはくさちつら
 錦本れ多来おは信
 難も人なれいふ来立
 くる錦本も流し移
 くれとれこちすま
 又ころアとさよと
 さひまハ錦本の極
 やまさくら花おほ
 こそい春あめさ
 人かハまの午を
 けくさくすまか
 とのや
 贈皇居宮サ茨子實季

いはくさちつら
 スイ
 れこちすまありち
 春よりちわてありと
 る女乃さしあるま
 建つひさるる命法師
 やまさくら花おほ
 ひと乃ころちをほ
 堀河院市時苑人
 贈皇居宮乃花方子
 西ひくかさひ信
 ちゆらちひもさう

初七六

心女鳥羽院母信

雲をりぬ人の心
 白菊の心おほも
 うりか女すうわらぬ
 ちり心のりりり
 いらくさく菊れり
 ぬを我心は
 心もあはれ
 ちゆらちひもさう
 菊も終方ちかき
 我の心は
 さよらちひもさう
 ねしかりと

今お物とつて白菊の
 源家時
 雲をりぬ人乃ころ
 ちゆらちひもさう
 心女鳥羽院
 大納言公實
 ちゆらちひもさう
 うりか女すうわらぬ
 中納言
 ちゆらちひもさう
 源家時
 ねしかりと

長原院總朝臣

誰よりいんそ原を
 回習いゆりなれと
 君のあやしくも
 すと歌くはと合り
 うまうまにいらつら
 け上りあひまとい
 ろうとあふんと後
 我の嬉ききりやま
 ぶとて母は嬉ま
 るあふんいらつら
 んこのあつり可な
 こいすれいらま
 赤合てあまは情
 市恒ちあつり火
 去昔云市恒ち内裏の

うまうまのあつり
 ひのうまあつり
 こいすれいらま
 ちり母にすまんと
 野恒ちりあつり
 ひのあつりあつり
 我のあつりあつり
 共給の備信總子
 心受法師

104

市恒ちりあつり
 去昔乃中につら
 去つらあつり
 市恒ちりあつり
 と焼保心あつり
 月をよつらあつり
 ひのあつりあつり
 られらあつり
 のあつりあつり
 らあつりあつり
 人あつりあつり
 我のあつりあつり
 野(一)

いらすれいらま
 山あつりあつり
 らあつりあつり
 市恒ちりあつり
 ひのあつりあつり
 我のあつりあつり
 共給の備信總子
 心受法師

任り方あきし
序多の如く
浅深小節 三より皆
成のくめ

我の千やまの
命を別人とす
可なりやうも
人の我の命も
此より我の命も
いふなり
まをせん

命の千やまの
命を別人とす
可なりやうも
人の我の命も
此より我の命も
いふなり
まをせん

任り方あきし
序多の如く
浅深小節 三より皆
成のくめ
我の千やまの
命を別人とす
可なりやうも
人の我の命も
此より我の命も
いふなり
まをせん

和東武部

八二

命の千やまの
命を別人とす
可なりやうも
人の我の命も
此より我の命も
いふなり
まをせん

一言紀伊

うらやまの心は
こころのうらやま
はれどあはれ
うらやまの心
うらやまの心
うらやまの心
うらやまの心
うらやまの心
うらやまの心
うらやまの心
うらやまの心

あはれに
あはれに
あはれに
あはれに
あはれに
あはれに
あはれに
あはれに
あはれに
あはれに

源信朝臣

詞苑和歌集卷第九

雑上

雑 四季に
神祇を
うらやまの心

あはれに
あはれに
あはれに
あはれに
あはれに
あはれに
あはれに
あはれに
あはれに
あはれに

源信朝臣

春は
あはれに
あはれに
あはれに
あはれに
あはれに
あはれに
あはれに
あはれに
あはれに

一も乃浦まや〜
 垣壁煙の霞のにお
 て打つとむら春り
 ちれぬと也
 あや〜と〜とね乃
 あや〜と〜と^{たて}進^り進^り也
 神は物云は并をい備衆
 のあやをさういより^ま并
 とヤんわり仍な衆也
 行花集より入るわを
 いね乃志のえと^ま衆
 とあれいすりとと^ま衆
 られいち又云^ま衆
 格のねは^ま衆よか^ま衆
 い〜い〜い〜い〜い〜い〜

一も乃浦まや〜
 垣壁煙の霞のにお
 ちれぬと也
 あや〜と〜とね乃
 あや〜と〜と^{たて}進^り進^り也
 神は物云は并をい備衆
 のあやをさういより^ま并
 とヤんわり仍な衆也
 行花集より入るわを
 いね乃志のえと^ま衆
 とあれいすりとと^ま衆
 られいち又云^ま衆
 格のねは^ま衆よか^ま衆
 い〜い〜い〜い〜い〜い〜

平忠國朝長

打ぬ〜と〜と本とま
 母林良我も同格也
 と〜と〜と〜と
 平〜と〜と〜と
 あ〜と〜と〜と
 此の花は咲ぬ〜と〜と
 りに我も舟出と〜と
 也天も湯あ〜と〜と
 志のあ〜と〜と
 へ〜と〜と
 本ま〜と〜と
 本乃〜と〜と
 佐初のはあ〜と〜と
 石と〜と
 自持〜と〜と

あ〜と〜と〜と
 舟出と〜と
 佐初のはあ〜と〜と
 石と〜と
 自持〜と〜と

天台座主深心

人とうせのふとく
舟もたは物たよの密
ち乃花と車後
よもせすつと何力
ちぬまた今ひと
つらもあぬえさ
身ハれたるのほ物
心ありれよ

ちぬまた今ひとく
花うらまへつと
花を可ひよをよめ

大徳の道徳

春今れはちり
極魚もたは知
海をまも春探
鯛取も知はひ
さ揚翅もま
むらさきと
男とまへ人

春今れはちり
うくつと
宇治前太政大臣
ついできか
男をまへ人

花をまへ人
迷惟りや
らさうれ
男此不肖の
あつさう
ひるは花

ちる花
二条園白
とひとせ
小式部内侍

春乃こね

小式部内侍
乃常の人
心もさ
又さう
恨む
はま
く

春乃こね
わらうり
入道
又さう
大納言道綱母

花をまへ人
ちる花
二条園白
とひとせ
小式部内侍
わらうり
入道
又さう
大納言道綱母
花をまへ人

飛りし花のこころ
 くれはふれを八重と
 敷はてめらん神に只
 是とまうとてこし下
 重とてまうとて同く
 としり兼家の代妻也
 かす山乃若ら子
 小乃若ら子といはる
 南家小家兼家武家
 とてある中のお家と
 中く是は海乃乃海家
 皇布皇嘉門後いふに
 未られいりよあり彼
 南家堂造始より春日
 のまるとは明神の補

是とまうとてこし下
 重とてまうとて同く
 としり兼家の代妻也
 かす山乃若ら子
 小乃若ら子といはる
 南家小家兼家武家
 とてある中のお家と
 中く是は海乃乃海家
 皇布皇嘉門後いふに
 未られいりよあり彼
 南家堂造始より春日
 のまるとは明神の補

陀の南乃若ら子
 て今うとて人の若は
 此言を本まらばし
 今やうとてやんめの
 歌季乃乃若ら子
 是ハリよありわら
 乃若ら子といはる
 一のとも切し連ま
 志まよめハあまの
 浦といはんといふ
 わらうとていりま
 弟の備とのまは凡
 少ハはのよとていふ
 まうとてよわらま
 くれはとていりま

房乃車まうとてま連ま
 まうとて暖よゆゆら
 今まうとてやんめの
 わらうとていりま
 是とまうとてこし下
 重とてまうとて同く
 としり兼家の代妻也
 かす山乃若ら子
 小乃若ら子といはる
 南家小家兼家武家
 とてある中のお家と
 中く是は海乃乃海家
 皇布皇嘉門後いふに
 未られいりよあり彼
 南家堂造始より春日
 のまるとは明神の補

贈大官 長文
 歌季乃子

このころにまはる
甲かよりけしむま
えより玉を替り
けしむ物と布の
勝とふれりいん
とくに世物ちよ布
引勝と白玉のま
くもちのまよ
本ありく徳もや
あま江乃まけま
若乃の舟乃ん
されハ輝のまよ
方を知りやま傷
心よよあり
甲ひてまよ

よあり
甲かよりけしむま
これぬのいまの流とひりん
新院住りかりま
まよ水草隔舟と
みけりま
大義の宗
あま江乃まけま
さなりま
まよ
まよ
まよ
まよ
まよ

藤原陸奥朝臣
大納言兼子

月九日

とよ山乃月の吉日
きとんく我身生
乃こいこくとお
よあり

ありしころに
お捕り乃ま月
を賞し
この月より
とあり
月入り
王子御宮
舟ま
ありて

とよ山乃月
又長實信濃守
に
系太史
り

若原為真

ありしころに
こよい
月あり
まよ
まよ
まよ

人を敵を用いた母
身下り来り母を
ゆれはがやと安道
ととていひの護
月つら人の世
心酒らと

六条院 六条の南を
町の東端の御橋を
るやとと六条院と云
は池の月とて一と
密りたまひてはるか
よとんとはつら
池よりやとては月
海人の氣うたは
と八尾の傍の池

あんと一はつら

大甲長徳宣朝臣

月つら人の世
ひとちやあつら
はくちあつら
乃池より月つら
五條よりよとせ
小一条院清範

池よりやとては月
あつらひと乃ち
あつらひと乃ち

トらふこと
官位昇進を我
ト下らふ
宮乃女房あり
中宮乃女房を
世乃中を
小一条院
月乃と
あつらひ
あつらひ
あつらひ

月乃と

左京大史右補中宮亮
時下らふ
宮乃女房乃中
あつらひ
あつらひ
あつらひ

世乃中を
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ

あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ

田中かきくくく
りききききき
巻のほのく
丁午のあつ月のまふ
平のうまき
秋のうまき
内方月のほのまふ
さむやまふ
板のうまき
板のうまき
てほのまふ
月なまふ
中りかき

新院住りかき
くゆきききき
きききき
丁午のあつ月のまふ
平のうまき
秋のうまき
内方月のほのまふ
さむやまふ
板のうまき
板のうまき
てほのまふ
月なまふ
中りかき

徳大寺實徳
公實の子

くまもちきき
りきききき
巻のほのく
丁午のあつ月のまふ
平のうまき
秋のうまき
内方月のほのまふ
さむやまふ
板のうまき
板のうまき
てほのまふ
月なまふ
中りかき

くまもちきき
りきききき
巻のほのく
丁午のあつ月のまふ
平のうまき
秋のうまき
内方月のほのまふ
さむやまふ
板のうまき
板のうまき
てほのまふ
月なまふ
中りかき

平忠國朝臣

きくわし人とは
はつたふれは
うらやうと
うらやうと

かこ山乃志く
天香久山乃自
おあーさう月
こ也天香久山
まくむらう
ーさくかこ山
兼しすうし
はえり関乃
りもも録
るや心

屏風乃志く山乃
月乃志く人乃
よめる 大江素

かこ山乃志く
おあーさう月
兼しすうし
はえり関乃
山城志く
兼しすうし
はえり関乃
山城志く

見

若原補子に
他若若後
大和若
補子父乃
いふ和
城志く
大和乃
也大玉
之上下
やうら
序乃
城志く
上乃
心乃
月乃

月乃あ
しりく人
なれい
おあ
ら乃の
久志く
乃ら
ら
月乃
しりく人

一もわさびの葉集
 秀身十首の一首
 かはせくらんしん
 東海に袖をさらし
 多しんを袖に
 何れもはらふわれつ
 らんを袖にまひ一袖の
 我御のぬれ一いれ
 一ふさひあまうし
 せし一も敷き
 我を袖に
 伊久人君故に我を
 りる所言ともいれ
 兼らるるしん
 一雪乃強き

一もわさびの葉集
 秀身十首の一首
 かはせくらんしん
 東海に袖をさらし
 多しんを袖に
 何れもはらふわれつ
 らんを袖にまひ一袖の
 我御のぬれ一いれ
 一ふさひあまうし
 せし一も敷き
 我を袖に
 伊久人君故に我を
 りる所言ともいれ
 兼らるるしん
 一雪乃強き

よめんらも
 三つねまを留
 一層あまのこ
 申されしん
 せらう
 一ん
 一申
 秋の
 秋の
 おま
 乃
 一
 一
 一

一もわさびの葉集
 秀身十首の一首
 かはせくらんしん
 東海に袖をさらし
 多しんを袖に
 何れもはらふわれつ
 らんを袖にまひ一袖の
 我御のぬれ一いれ
 一ふさひあまうし
 せし一も敷き
 我を袖に
 伊久人君故に我を
 りる所言ともいれ
 兼らるるしん
 一雪乃強き

和歌部

いりきれし物事すまぬ
足身三人よあつて
と物事いふも
—

信長乃ちりういふ

序舟之船に信長
り余も水屋事いふ
よとす物事いふ
人乃ちの信長いふ
よとす物事いふ
かたし—の信長
かたし—の信長
かたし—の信長
かたし—の信長
かたし—の信長

いりきれし物事すまぬ
足身三人よあつて
と物事いふも
—

信長乃ちりういふ
—

序舟之船に信長

り余も水屋事いふ
よとす物事いふ
人乃ちの信長いふ
よとす物事いふ
かたし—の信長
かたし—の信長
かたし—の信長
かたし—の信長
かたし—の信長

信長日記二月廿二日

少の月兼家公と信長
と精進よといふ
乃ちいふ物事いふ

かたし—の信長
かたし—の信長
かたし—の信長
かたし—の信長
かたし—の信長
かたし—の信長
かたし—の信長
かたし—の信長
かたし—の信長
かたし—の信長

信長日記
二月廿二日

赤穂衛門

大細の信長

少の月兼家公と信長
と精進よといふ
乃ちいふ物事いふ
—

赤穂衛門

かたし—の信長
かたし—の信長
かたし—の信長
かたし—の信長
かたし—の信長
かたし—の信長
かたし—の信長
かたし—の信長
かたし—の信長
かたし—の信長

出陣舟に信長

物らゝぬ男れらもけさ
に國をいつか〜
とある〜
またぬら〜
同〜
ら〜
〜
〜
〜
〜
〜

男らゝぬ男れらもけさ
志の〜男らゝぬ
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜

大郡之位

四九

人乃世まゆ〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜

人乃世まゆ〜
〜
〜
〜
〜
長元八年〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜

式部大輔資業

古風乃神也
丁年々の修はなれ
取れりるるるり
院れりるるるり
いなる寿合は後世
多と行念せし
神乃其をりり
いりりねを可いん
うまを要と也
と云行りりり
りり根と悟りん
まのまのま
もりりりりり
と可いりりり
世の中りりり

神乃其りりり
物りりりりり
ひりりりりり
せりりりりり
田坊内結
いりりりりり
うりりりりり
冷泉院
よませ
世乃中りりり

花山院は出家のち
父帝よりを
ア一わりんりり
定古今甚まはあり
子年小わりりり
と行りりり
もりりりり
まのりりり
命と正りりり
年一ぬりりり
又帝の正
まのりりり
れ命を
とく却老
ありりりり

わりん年を
正
年一ぬりりり
こりりりり
男を根りりり
和泉式部
ありりりり
おあ
はのま
として

聖にそのせむるを
 うまくしぬれとてぬ
 ありし人の怒きいぬ
 物をあしとせぬし
 せむしすけきつ
 情と恨じちるも
 ひしよよ山田とて力を
 山田君との引板とて
 塵をさした物を永と
 りつようてつて山賊
 と被れぬ我のこも
 ろりきつれすて公徳の
 情も同じぬすりし
 恨こすすも
 こかといふとよまけ

ひしつうううう 徳周法師
 ひしつううう山田とて力をあしぬれ
 わきのしんをいもろうすか子
師通の師實公子
 後二条園向とてあまらうううう
怒り
 りりけられぬ家乃中よは情あつあ
イニシ
 じしし出づして女房乃中よは
 いれづる 源仲正 金葉飛る 共庫
 こかといふとよまけよううう
 うあひしあまのりあ乃まうう
そらう
 ぬわけ乃けりこかといふと
 こかといふとよまけ

師通公教氏長者とて
 かりし各六徳氏神の
 三笠山よりとてさす
 けよも由たよに後れ
 をうつてぬおまも
 事なげまいて下にお
 るうひちとてあま
 よまよとて事此縁也
 申すひしありあま
 僧心の山見願負あま
 けよいづあまのふ
 おをさあまうとて皆
 何の縁をいも
 ぬひぬわわわめ
 毛楊貴妃馬鬼ウツク

くと僧正源光のゆりてゆれい
 こまようこひよお月おりわ
 よめ 平波姫 カネツマ 古傳
 申すひしありあまのりあま
 けあまぬえのりあまのり
 長恨歌乃心をよめ
 源道深
 おひぬわわわのこまをいれ
 けさちうううなれをうう
 けさちうううのちま京を帝蜀シマより還幸の時
 毛楊貴妃馬鬼ウツク

乃馬鬼の塙のりかろく 貴妃の身をさひゆくうらたわ
きとひりの骨も死しと只ひゆく 貴妃の死せる所は浅茅うらの結結
少くもなまじりし恨秋の馬鬼塙塙泥中不見玉魂空死處死處君臣相顧盡相顧盡
泣家泣家りしある心心なりけし集集考考多多下首のうらた
しけるるの松
武隈松奥列し
あゝとくちのわさの海ぬ
我が恨集りしとて
ゆゑはる乃國乃國目ふ
いふれをまらと若
とよねのりありん
ととね福をうらた
春日乃をこれあり
十一月申旦二月乃
ふとくふとくくは第

あゝとくちのわさの海ぬ
まのつらまのつられりけしけしとふ
世ま志のりしけりし此春日乃を
のまりの帯をまらとらとふ
とふとくちのわさの海ぬ

播磨仲朝臣

あゝとくちのわさの海ぬ
我が恨集りしとて
ゆゑはる乃國目ふ
いふれをまらと若
とよねのりありん
ととね福をうらた
春日乃をこれあり
十一月申旦二月乃
ふとくくは第

あゝとくちのわさの海ぬ
まのつられりけしけしとふ
世ま志のりしけりし此春日乃を
のまりの帯をまらとらとふ
とふとくちのわさの海ぬ

左京大夫藤浦

高内侍 三位兼忠女
任母

大納言師光

文集五絃彈ニ第四絃冷
 冷宮鶴憶子菴中鳴
 とあるは心那の甲を
 篋の中とよりてて葉
 花地流五三の方流
 こ今くいと秋もやは
 感あふむ活あふむも
 の所ふい初よ對る
 去りてあふむとさうね
 こさあふむとさうね
 とさうねとさうねと
 どのうとさうねとさ
 とさうねとさうねと
 とさうねとさうねと
 とさうねとさうねと

男乃うさいさぬるりささうりも
まをい
 いまゆいすさ乃こさうかあま
 大花の区房
 うもれ本乃ささいさる事といあさ乃
 花乃こさるえわすれさりたり
 野志とと
金葉集
 大官相國
 いまゆいすさ乃こさうかあま
 のさうねとさうねと
法法公乃志の詩なり
 小野官太大臣のさうねとさうねと
 り乃事ささいさぬるり

四九六

らぬ心さう
 うもれあの下に柱れ
 埋本ハ世の甲とさうね
 花をゆいさうねと
 埋まるとさうねと
 古の花心とさうねと
 いまゆいすさ乃こさうかあま
 今げのさうねと
 葉集とさうねと
 世とさうねと
 さうねとさうねと
 さうねとさうねと
 こさうねとさうねと
 の人月とさうねと
 さいはらさうねと

清原元輔
 さうねとさうねと
 いらんをさうねと
 野志とと
 大花の区房
 いまゆいすさ乃こさうかあま
 のさうねとさうねと
 小野官太大臣のさうねとさうねと
 り乃事ささいさぬるり
 萩原季通朝臣
 いまゆいすさ乃こさうかあま

しらほしとあめ
ゆすなりのし
古乃無き程ゆ
末り無き八月の
さるもさの千歌
つらき
いひくも程
らき力いひ
程死い
也下り
唐田 扱は也日本紀
神功皇后天照太神と葉山姫と
后と廣田明神とやして
あはれの芦原と
竟

少くもこの母あは
神祇伯孫仲唐田あはく
侍もく
よきこと
わら身ひ
あはれは乃
わら身ひ
あはれは乃
わら身ひ

付九十九

河火くすまの極
ちや和名云
云三品已上五架三門五品
已下三門兩下
乃高方
あきかれと
強く
は田上の
三門の

詞花和歌集卷第十

雑下

都は位依く
ままわて
河火くすまの極
あくれ出
女も乃
三門の
いひく
四位

とも田上やへ後秋の
 ときしと上方に彼岸
 つむすより序あふ
 歩の程く解さるる
 我方もやうに海を
 ぬく
 びりあふてやわを
 鶴鳴鼻ハ詩の宿よ
 ておはに舟の心は
 よを早し聴きよ
 めり
 二日月乃又ありけり
 人同一葉一花も
 月のみちるるにけり
 けてハさるるにさるる

^{サハニ} 鼻こころをよめる
 菟原公重朝臣
 びりあふてやわをさるる
 こころあはくやわをさるる
 新院六条殿よがさるる
 時月あ
 りく伝里りる 夜津舟より一月前
 言志こころをよめる
 上下結るる 右近中将教長
 こころありあはくやわをさるる
 じつ世をよめる

ちる花よふもやま
 いまちるもよふも
 てまの心はあは
 るるあつちり
 せよまの心はあ
 ありのまねを
 世中さるる 時疫
 こころあり人
 比ふれ

梶花乃ちるをよめる
 菟原実可朝臣
 ちる花よりふもやま
 りのまねを
 世中さるる
 増基法師
 ありのまねを
 未だあり露れありの世や
 秋乃野をさるる
 尾花の
 風よさるる

うらやまのうらやま

花すもよもよぬらひこころとまわりらん
はなの梅は我流り
とよよとこころの
野へまよとまひま
とる身されは花の
招くあまのまこと
よまにたりか花のまの
あまのまのまの
花のまのまのまの
こころのぬらひこころ
い流の上のこころ
にこころのまのまの
かこころのまのまの
一たのまのまのまの

源親元 安房吉
おまほ二年

花すもよもよぬらひこころとまわりらん
い流の上のこころ
心ちれいさすかたされり
花のまのまのまの
よまにたりか花のまの
あまのまのまのまの
世中まのまのまの
花のまのまのまの
かこころのまのまの

油十ノ二

うらやまのうらやま
子流とまのまのまの
い流の上のこころ
こころのぬらひこころ
い流の上のこころ
にこころのまのまの
かこころのまのまの
一たのまのまのまの

くかこころのまのまの
いさあひ乃か花のまのまの
よまのまのまの
タムれいぬらひこころ
あすもよもよぬらひこころ
大納忠教 本橋岡白子
学れまよもよぬらひこころ
あすもよもよぬらひこころ
うらやまのうらやま
あすもよもよぬらひこころ

高原教良母 忠教山方

中はさうしてみても
 小僧とすも身は我
 りくことさし一箇の
 なるそのまはれは
 りんとさしにても
 千五人乃び一かたふ
 能く我身しじり
 一いつちとさん物を
 ことさし
 この世に一月さうも
 月さうりの昔さ
 りつさく冥途を
 守じやわささる
 さらば

とうきよきと車の千きりけるは
 よめる
 法橋法師法橋法師
 千五人乃び一かたふよちりゆを
 じましくよさうりもつんとすしん
 なるまきふ小出内く遠く侍る
 よ夕陽乃びいつくさりたれ
 よめる
 神祇伯政神祇伯政
 こらよした月さうり引くさるま
 あそれいつるや千りやとらん
 病なりさち侍る此堂のあさ

おかほくまのさしだぬ
 病なりさく冥途を
 守じやわささる
 さらば

かきんといの命に
 奉国乃命かりん
 のらの可かきん
 ねの我死くも奉
 国乃別まんの懸はに
 世母のさひでし侍
 けきの奉民和泉の
 果くは恒長の山山

良選法師
 おかほくまのさしだぬ
 常守乃わけくこえんとすしん
ノカチカ 匡衡子
 大江奉国の船長船長の形むく
 せりつりさく侍るはよめる
 赤深法門奉国母
 かきんといの命に
 さしんといの命に
 病なりさち侍るはよめる
 けきの奉民和泉の

二重病限り時母
赤深之首の舟を
二一首こそは病草
愈のは盛衰のよゆ
この世よりいふも
梅より我より短
あゝ又離散して
世よりいふも
さう懸きこころの
多病をさひの

この世よりいふも
推とはむの
志え乃に
ふ一罹ん

八重を梅と今
足とやとつ
了んせられたる
大僧正の号

この世よりいふも
ちりく
人乃志ぬを
よめる
法人ふ知

この世よりいふも
は今らん
は今らん

何十回

わらわの
無き
あま
依田
クハ
何
我
乃
ら
佐
大
信
杜

わらわの
無き
あま
依田
クハ
何
我
乃
ら
佐
大
信
杜

大正
文章博士

わらわの
無き
あま
依田
クハ
何
我
乃
ら
佐
大
信
杜

良選法師

^{十五}而後乳給長俄下言
 ず人々を同定言
 付雨良運の旧道とい
 う下下る亦人の感歎
 去く皆以下馬と
 去原やたの炭屋の
 清貧のさめこつと信
 神にれは炭屋もさ
 ららひいといふあり
 る平下川さうの上を
 心明し
 おもひやまのめれ
 心度さし身れ家の集
 るていといとやん
 と世もつとと早

わりやとのみさうりありと
 歌きくと 賢智法師
 あ平下川さの上をさうぬきと
 せらうきめありつるさりあり
 この集撰すといふ家集こいて
 付たれいよめる 太政大臣 實教
 おもひやま心なるめれあさこたれと
 おきちあうすといふといふと
 因坊内侍あまうりさりわねとつて
 といつらういさる 大徳の退房

下乃心なる
 かりさめ乃うき世の
 世のさうのめれとい
 去くは明燈の園
 少きとといひわけ
 出家せしむる乃
 うやまきと園の
 さいて世の月のさ
 リカうくさきよは
 よめ
 かつりありあゆま
 ゆませいり
 リの海に影を
 といふありさき
 男とする人

かつりありありさ世の園をうきとて
 うやまきとくもゆる月の那
 法師よりわけてのらな系天丈
 石橋の家さく海原とよめる
 沙弥蓮寂 和泉入道
信名及經
 かつりありあゆませいり
 おもひやま心なるめれあさこたれと
 歌きくと 賢智法師
 あ平下川さの上をさうぬきと
 せらうきめありつるさりあり
 この集撰すといふ家集こいて
 付たれいよめる 太政大臣 實教
 おもひやま心なるめれあさこたれと
 おきちあうすといふといふと
 因坊内侍あまうりさりわねとつて
 といつらういさる 大徳の退房

勇を擧ぐらばるゝと
むとされし様は擧ぐら
ぬす事不備なる様
されしと大隈の心
大隈者の使 世有
諸國乃祖統と掌
謀の事乃時切下
之を問て西ふ
支配せしと織原
おしつる心切下
を問て諸國の貢
調を致さむは
乃志ふ事とせむ
はくそ山ありと
はくそ山ありと

藤原實家ひらぬは傳へる時
大隈者の使 世有ひらぬは傳へる時
この時若大隈の心ひらぬは傳へる時
匡房 世有ひらぬは傳へる時
物ををいしとひらぬは傳へる時
ひらぬは傳へる時
大隈大隈宮肥後 金葉集
はくそ山ありと
ひらぬは傳へる時
下鷹 世有ひらぬは傳へる時
乃志ふ事とせむ
はくそ山ありと

筑波の学僧の心
はくそ山ありと
河内源右衛門
貢調を致さむは
はくそ山ありと
年をく星をく
星をく星をく
く勉むる心
乃志ふ事とせむ
はくそ山ありと
中乃 世有ひらぬは傳へる時
はくそ山ありと
はくそ山ありと

大中長徳宣朝臣
年をく星をく
ひらぬは傳へる時
白河院位 世有ひらぬは傳へる時
大隈 世有ひらぬは傳へる時
傳へるを宣旨乃
はくそ山ありと
はくそ山ありと
はくそ山ありと
はくそ山ありと
はくそ山ありと

宣旨れそいりあは
りしむる事上天子
の旨にまかせぬを
その心を上りしむ
るにまかせぬを
宣旨乃そいりあは
りしむる事上天子
の旨にまかせぬを
その心を上りしむ
るにまかせぬを

ぬ
宣旨乃そいりあは
りしむる事上天子
の旨にまかせぬを
その心を上りしむ
るにまかせぬを
宣旨乃そいりあは
りしむる事上天子
の旨にまかせぬを
その心を上りしむ
るにまかせぬを

河十ノ七

我々の我心を張り
るにまかせぬを
とせ乃そいりあ
はりしむる事上天
子の旨にまかせぬ
をその心を上りし
むるにまかせぬを
宣旨乃そいりあは
りしむる事上天子
の旨にまかせぬを
その心を上りしむ
るにまかせぬを

河院時百首をくの中
とせ乃そいりあ
はりしむる事上天
子の旨にまかせぬ
をその心を上りし
むるにまかせぬを
宣旨乃そいりあは
りしむる事上天子
の旨にまかせぬを
その心を上りしむ
るにまかせぬを

子乃とてよけお母か
 さ集りしとて母の
 尺とてよけお母か
 の下にはお母か
 孫とて後り作森
 山株也
 おのひつねうら
 神くさうら
 思ひくさうら
 われは思ひくさうら
 山とてよけお母か
 後り作森
 われは思ひくさうら
 思ひくさうら
 の力とてよけお母か

しつわよははくくしつわはくくし
 しつわ
 おのひつねうら
 新院位にかうり
 幸とてよけお母か
 よよめ
 われは思ひくさうら
 中わりとてよけお母か
 後冷泉院浄時大嘗會
 お集りしとて母の
 尺とてよけお母か
 の下にはお母か
 孫とて後り作森
 山株也
 おのひつねうら
 神くさうら
 思ひくさうら
 われは思ひくさうら
 山とてよけお母か
 後り作森
 われは思ひくさうら
 思ひくさうら
 の力とてよけお母か

さうけりしとて母の
 尺とてよけお母か
 の下にはお母か
 孫とて後り作森
 山株也
 おのひつねうら
 神くさうら
 思ひくさうら
 われは思ひくさうら
 山とてよけお母か
 後り作森
 われは思ひくさうら
 思ひくさうら
 の力とてよけお母か

浄屏風は御中玉言金山よあは
 の人花は千々か
 によめ
 うちむねくさうら
 何とてよけお母か
 今上大嘗會悠紀書
 小板倉山田よ
 めりこれを入
 る所を法
 板く乃山田よは
 浄屏風は御中玉言金山よあは
 の人花は千々か
 によめ
 うちむねくさうら
 何とてよけお母か
 今上大嘗會悠紀書
 小板倉山田よ
 めりこれを入
 る所を法
 板く乃山田よは

揚子江のほとり
あつたころ月を
さす時ハ秋の心
せめてくせむ心
かこころ乃岑のう
凡越岑信はこ
山のまへ
若原光恒 在申安
恒前名は時明子
隆恒乃父也
びりーんー岳井の
しるぬみは不雅
せまらうわと我ハ
きこるまは

かこころ乃岑のう
あつたころ月を
さす時ハ秋の心
せめてくせむ心
かこころ乃岑のう
凡越岑信はこ
山のまへ
若原光恒 在申安
恒前名は時明子
隆恒乃父也
びりーんー岳井の
しるぬみは不雅
せまらうわと我ハ
きこるまは

河十ノ十

おのひゆもあま
拾遺集第六
ゆきま
三条太政大臣 頼忠公
号廉義公 實頼公
公任乃父也
あつたころ月を
さす時ハ秋の心
せめてくせむ心
かこころ乃岑のう
凡越岑信はこ
山のまへ
若原光恒 在申安
恒前名は時明子
隆恒乃父也
びりーんー岳井の
しるぬみは不雅
せまらうわと我ハ
きこるまは

あつたころ月を
さす時ハ秋の心
せめてくせむ心
かこころ乃岑のう
凡越岑信はこ
山のまへ
若原光恒 在申安
恒前名は時明子
隆恒乃父也
びりーんー岳井の
しるぬみは不雅
せまらうわと我ハ
きこるまは

うらら... 月... 娘... 道兼公と云ふ... 道兼

けうり... 長徳元年五月八日... 藤原相如... 園融院御製

葉... 相如... 待賢門院安房皇太后... 人志れと物おのり

おのり... 一条橋... 伊予謙徳公... 藤原義孝... 人志れと物おのり

とらふていふ
かひていふていふ
本乃生ていふていふ
くく森とていふていふ
あふていふていふ
彼うていふていふの款
きとていふていふ
かひていふていふ
天曆乃帝がれ
康保五年五月廿五日
崩於清冷殿
くふわいていふていふ
くふわいていふていふ
くふわいていふていふ

兼國子よとていふていふ
かひていふていふ
いふていふていふ
天曆乃帝がれがり
七月七日はつていふ
あふていふていふ
くふわいていふていふ
くふわいていふていふ

河ナリ又ナリ

セタのられり
ま年七月七日
やうていふていふ

あふていふていふ
父乃服ていふていふ
あふていふていふ
やうていふていふ
あふていふていふ

あふていふていふ
セタのられり
くふわいていふていふ
あふていふていふ
あふていふていふ
あふていふていふ

神祇伯於仲

あふていふていふ
くふわいていふていふ
大江匡衡がり
あふていふていふ

赤深漢門

こころまじりし
 まきりし
 右共律令一本は
 出書乃りしと
 とも常の事
 未よし
 末よし
 ちの
 ちの
 ちの

こころまじりし
 何それ
 右共律令
 比女
 新院御製
 治暦四年四月十九日崩
 後冷泉院御時
 ちの

河内

右共律令一本は
 出書乃りしと
 とも常の事
 未よし
 末よし
 ちの
 ちの
 ちの

右共律令一本は
 出書乃りしと
 とも常の事
 未よし
 末よし
 ちの
 ちの
 ちの

いづつ身の上よめく
こそれんとすしんと
世成はつとてしと
くちまてとてとて
つとてとてとて
ようせとてとて
世乃とととて
かてとてとて
一とてとて
かてとてとて
の今世も
あてとてとて
とてとてとて
のやとてとて

いづつ身の上よめく
こそれんとすしんと
世成はつとてしと
くちまてとてとて
つとてとてとて
ようせとてとて
世乃とととて
かてとてとて
一とてとて
かてとてとて
の今世も
あてとてとて
とてとてとて
のやとてとて

四十一

舟より一舟
いづつ身の上よめく
おれとてとて
わつとてとて
賊窟宅地
おれとてとて
一とてとて
あてとてとて
未来乃とてとて
若海のうとてとて
かてとてとて
とてとてとて
も志りの程とて
とての元とてとて

舟より一舟
いづつ身の上よめく
おれとてとて
わつとてとて
賊窟宅地
おれとてとて
一とてとて
あてとてとて
未来乃とてとて
若海のうとてとて
かてとてとて
とてとてとて
も志りの程とて
とての元とてとて

選子同親
村土重女
号天無院

即身成佛 聖無動摩
 訶滅怒王秘密陀羅尼
 經之序云三藏聖者釋
 見我心者發菩提心
 聞我名者斷惑修善
 聽我說者得大智慧
 知我身者即身成佛
 至極意傳教者向云
 能化所化俱無歷劫
 如法經方即身成佛
 露乃身れきしきく
 即身成佛といふこと
 して九丈するりちる
 るふあし修り勤
 りちるくのちよく知

即身成佛といふこと
 よう人志しす
 露乃身れきしきく佛の心
 けしめくのちるるるる
 舍利傳乃にはわくくは成佛道
 乃心を人こころよもせ侍り
 よよめる 國白前太政大臣
 ようにちると佛の心とあはれん
 わりころるるるるるるるる
 古京大文が満

河ナ五

願成佛道

法華經安樂行品云
 願成佛道令衆亦念
 ようにちると佛の心
 わる佛の心とあはれ
 生とちるとあはれ
 は我心とちるとあはれ
 めとちるとあはれ

いそわろころる乃月とあはれり
 や子りりりりりりりりりり
 常在靈鷲山乃心とあはれり
 登蓮法師

世乃中人人の心乃らるるるる
 ろかられするあはれりけれり

いそわろころる乃月とあはれり
 ねろころるるる
 世乃中人乃心 常在靈鷲山乃心
 我初これの常に靈鷲山乃心
 佛の常在不滅とあはれり
 難遣恭敬の心とあはれり

ヲリ活シ一ノトトヲス系
 五カタクラヤニルン

遷業以舟雅下り
何の或本了降々

つゝいさつゝをやはらぐ世を
守りて人神のりり

己上七首

左邊待公行はゆりり
ゆりり比女房はけりり
事ゆりり法海ゆりり
新院淨製

延寶八年六月廿八日是集抄深業之初也廿月廿一日終功業

